

わたしの視点

from JICA Leaders



photo by Asada Yuki

日本の経験を生かした 理数科教育協力を

質の高い基礎教育の普及が世界的に重視される中、JICAは主に教員研修による理科教育の質の向上に取り組んできた。この分野で日本が貢献する意義を、基礎教育事業を担当する菅島信子・人間開発部第一グループ長に聞いた。

菅島 信子

JICA 人間開発部第一グループ長

Kayashima Nobuko

先生の質が 教育の質を左右する

開発途上国では、小学校入学時点の就学率は向上していますが、実は、中途退学したり落第を繰り返したりする子どもが多いのです。それは子ども自身の学力というよりも、そもそも適切な質の教育を受けられない環境に置かれていることが原因です。

教育を構成する要素は、学校、先生、教科書などいろいろありますが、どうしても欠かせないのが先生だと思います。特に、子どもの人格形成も含めた基礎教育における先生の存在はとて大きく、先生の質によって教育の質が左右されるでしょう。JICAは、子どもたちが適切な質の教育を受けられるようにするには先生の質の向上が重要と考え、教員研修の協力を重点を置いていきます。

また、基礎教育の中で特に力を入れているのが理数科教育協力です。日本でも昔から、読み書きそろばん」といわれたように、基礎教育では読み書きの能力と算数や理科の能力が重視されています。それらは生活技術の基礎となります。例えば水を煮沸して使うときにも、薬を飲むときにも、職を得るにしても、基礎的な理数科の知識がないと困りま

す。収入を得て、子どもを育て、家族と健康に暮らすために、理数科の知識が必要なのです。それは人間の安全保障にもかかわります。

なぜ日本が 協力するのか

最近では国際学力比較における日本の子どもの理数科能力の低下が指摘されていますが、日本では理数科教育の拡充が社会の変化や経済成長の基礎となり、開発における理数科教育の意義を身をもって知っているといえます。

また、日本の教育は層の厚い優秀な先生に支えられています。日本には先生が生涯にわたり学び続けられるメカニズムがあるからだ

と思います。公的な研修制度だけでなく、私的な研修や自主的な研究会

などがあり、それを行政や社会が支えています。また同僚や周辺校の先生、指導主事を招いて授業を公開し、授業の改善について皆で検討する授業研究が一般的に行われています。ほかの多くの国では先生にとって教室は自分の城で、授業を公開することに抵抗感があります。そういう教室現場を重視し、授業を改善するための実践的な工夫や経験が日本には蓄積されています。このような知見を活用して日本が途上国に貢献する意味はあると思いますし、批判されがちな日本の教育現場を見直すきっかけになると思います。

JICAの理数科教育協力は、教員研修による授業の改善を目指すも

のが中心で、特に子どもが実験・実習や演習を通して授業をより良く理解し、学ぶ楽しさを得る生徒中心型の授業の導入を重視しています。プロジェクトでは、研修後の試験やアンケート調査、授業のモニタリングなどで先生が研修で学んだことを理解し実践しているかどうか評価しています。

しかし、授業の質が向上し、子どもたちの理解力が変わったかどうかを測るのは容易ではありません。子どもの学力は社会の多様な要素が絡み合っているからです。例えば、試験制度が暗記中心型であれば、授業の効果がすぐに試験の成績には反映されにくいでしょう。そうだとすると、私たちはこうした協力が子どもにとって良い質の教育につながるこ

子を思う 親の気持ちは同じ

現在の役職に就いたのは「人間開発部」が新設された2004年4月で、それまでいろいろな部署を経験しましたが、いつも教育分野を意識しながら仕事をしていました。多様な要素が絡み合う教育の開発を通じて、社会や人にとっての幸せとは何かを考えさせられます。

例えば、カリキュラムで創造性を育てることが重視されているのに、実際の授業や試験は暗記中心型。でもそれって日本も同じで、詰め込み型の教育が批判されながらも、受験競争が激化・低年齢化している。また、アフリカ諸国では英語やフランス語で学校教育が行われていますが、学校に入るまで母語で話していた子どもたちにとっては大変です。でも親は、母語ではなく英語やフランス語で教育を受けていい仕事に就き、少しでもいい暮らしをさせたいと思っている。日本の親も子どもの将来を思って進学校に行かせようとする。一体何が正しい教育だろうと考えてしまいます。

スリランカでは、子どもたちが真っ白な制服や靴下を身につけているのを目にしました。私は自分の子どもに、真っ黒に汚れるから白い靴下は履かせないけれど、洗濯機もないところで白い靴下を毎日洗うのは大変だろうと思うんです。でも、真っ白な制服を着せて毎朝子どもを学校に送り出す時の親の気持ちや期待も分かるし、そういう中に人の幸せがあるような気がします。

社会の中で教育がどう機能しているかや、親の子どもへの思いや期待、幸せになりたいという気持ちは、どの国もみんな同じなんだと思いますね。



真っ白な制服で、元気いっぱい遊ぶスリランカの子どもたち(撮影:藤井勝彦)